

一葉相伝

右葉おほしといへども、葉数なき

とき、もとむる間、おそきゆへに、馬はやくつまる也。それと云も、一葉相伝のなき故也。先の一葉をもとめて、其後二葉数を直して、れう（療）治のうへに馬あまると云事なし

一、結馬にはくきのしるを馬形によりてかふ（飼ふ）也

一、ないら（内羅）にハ、うつ木（空木）の青実ふくりやうを煎てかふ也

一、虫腹にハ村立を粉にしてせゝ
なの水（下水の水）をもつて、かふべし

一、筋の病に桑白皮を煎て飼也

一、どくをくいたる馬に下水を飼也

一、血にゑふ馬ニくしん（苦参）を湯水にて可飼也

一、手おひ馬にきりんけつ「麒麟血（竭）」をかふべし

一、息つまる馬ニハ人之ふんをかふ也

一、ときつきたる馬にハかんざう（甘草）をさすべし

一、目ひるおへる馬ニハひてをさすべし

一、かさ、腫物ねひきにせきしやう
白根をさす

一、ひる馬ニハあさのミを粉にして飼べし

一、鼻血出る馬にハ水のあわかる石よし

一、内羅ヲをとすにハこもくさかげん有り

一、つくい馬ニハこせうのこにかげん有り

一、息レ云ニはわうゑんニかげん有り

一、つよき馬ニハ干きやう（乾姜）ニかげん有り

一、血留ニ古銭の霜ニかげん有ベシ

一、尿結にふなよし

一、きずにハとらのかわニかん（肝・大切な点）あり、いづれも秘葉也

桑嶋新右衛門尉 仲綱

鈴木主膳介

道重

水沢清五郎

文禄四乙未 二月五日 実秀

青柳与六郎殿

進覧